

学位論文抄録

我が国の医師と一般市民を対象とした無益な治療についての研究

(A Study on the attitudes of Japanese physicians and laypeople toward futile treatments)

門岡 康弘

熊本大学大学院医学教育部博士課程環境社会医学専攻臨床倫理学

指導教員

浅井 篤 教授

熊本大学大学院医学教育部博士課程医学専攻臨床倫理学

学位論文抄録

[目的] 「無益な治療」は主に終末期医療にかかわる臨床倫理問題であり、治療実施に関する医療者 - 患者間の意見の不一致・対立という図式で論じられる。本邦ではこの問題はこれまでほとんど議論されていないが、終末期医療を混乱させる一要因であることが示唆され、その解決には適切な治療・行うべき治療に関する社会的合意の形成が必要であると考えられる。本記述研究は、我が国では無益な治療の問題がどのように存在するのか、医師ならびに一般市民のこの問題に対する考えと、両者の相違を評価することを目的とした。

[方法] 調査①：日本人医療者を対象に面接調査を行い、自身が無益と判断した治療の実施経験について質問した。そのような治療の実施理由、治療の無益性の判断根拠、無益と判断した治療の中止や差控えに対する考えなどについて、質的内容分析によるカテゴリー化を行った。調査②：予備調査の結果を元に質問票を作成し、我が国の医師と一般市民を対象とした量的調査を行った。無益性が問題となる治療の実施についての判断、治療の無益性を判断する根拠、量的無益性を示す閾値、自ら無益と判断した治療の実施頻度と理由などについて質問し、両者の傾向と相違を評価した。

[結果] 調査①：回答者全員がそのような治療の実施を経験しており、患者側からの治療実施の要求だけではなく、意思決定プロセスの不調や治療中止に関する制度の不備などがその実施理由としてあげられた。無益性を判断する根拠として、治療に伴う患者の心理的負担やコストといった医学的側面に依拠しないものが含まれた。回答者はそのような治療の中止や差控えについては肯定的であったが、実際の中止や差控えは困難であると感じており、その条件として、実際の患者側の納得、治療中止に関する制度の存在、第三者による判断などを挙げた。調査②：医師群よりも一般市民群の方が、無益性が問題となる治療の実施には有意に肯定的であった。治療の無益性の判断根拠については、医師群は医学的事項や患者の QOL への治療の影響を重視し、一般市民群は患者の家族の治療実施に関する意向や治療がもたらす心理的影響を重視するといった相違がみられた。量的無益性を示す閾値は両群において広範囲にわたっており、両群の約 4 割が閾値を特定しなかった。医師群の約 9 割が自ら無益と判断した治療の実施経験を有しており、患者側の治療実施要求、意思決定プロセスにおける問題、治療中止に関する制度の不備がその重要な理由であった。

[考察] 我が国においては、無益な治療の問題は決して稀ではなく、その実施理由は医師 - 患者間の意見の不一致だけではない。医師よりも一般市民の方がそのような治療の実施に積極的である。治療の無益性の判断は恣意的側面をもつが、両者間には相違がある。

[結論] 本研究における一連の調査結果は、無益な治療の問題はベッドサイドレベルではなく、社会レベルで解決されることを示唆する。